

社会参加がない子どもたち —登校拒否生徒へのかかわり—

野田俊作（大阪）

*川西南中学における講演

要旨

キーワード：

はじめに

私の主な仕事は、今、登校拒否が半分ぐらいと非行の関係が半分ぐらい。あと所謂情緒障害児といいますが、神経症の子どもたちとの付き合いがわりとあります。

むしろ、今現在私がつきあっているのは、完全に学校からドロップしちゃってる—中学出たけれども全然学校へ行けなかったとか、高校やめちゃったとかいう子が半分以上。現に登校している子ってのは、比較的今は少ないんですけど、かつてはずいぶんそういう子供達も診ました。

「がちんがちん」と「ぶらぶら」と

で、この登校拒否・非行の問題に関わってから十数年ぐらいになると思うんですけども、ものすごく早く型が変わってくるというか—登校拒否の本を書いたのが5年ぐらい前なんですけれども（7～8年ぐらい前かな）—その頃の登校拒否児と今の登校拒否児とはすごく違うんですね。

校長先生が言っておられましたように、例えば、校内暴力だとか粗暴な非行ってのは、確かに近年非常に減ってきて無気力な子どもが増えてて、登校拒否にかんしても、家庭内暴力をともなった子が減ってきて全然やる気のないタイプの子が増えてきてて、非常に違ってきているなあとこの感じがあります。

ひとことでいうと、以前、比較的“反社会的”という感じで問題が出てきたのが、次第に“非社会的”という感じに変わってきているという事でまとめられる。

で、反社会的な子っていうのは要するに突っ張っているわけですけども、どんな形であれ—それが家庭内暴力であれ、非行であれ—突っ張ってて、突っ張るのは僕好きなんです。

医者ですから、昔、おじいちゃんおばあちゃんを診てた時期—その頃内科の研修をやりまして、中風のおじいちゃんおばあちゃんを診ていたのですが—整形外科の先生とか、あるいはリハビリテーションの先生方に聞くと、中風でも二種類ありましてね。がちんがちんに堅くなるやつと、ぶらんぶらんに柔らかくなるやつとがあるんですよ。堅くなる中風は歩けるんです。そのつっぱりを利用して松葉杖でも何でも使って歩けるんですけども、だらんだらんになるやつは一生二度と歩けないんですね。

まあ、いってみればこっち（反社会的）が突っ張り中風でこっち（非社会的）がぶらぶら中風

で…。

社会参加がない子どもたち

現象としては、非社会的な子どもたちっていうのは以前の反社会的な子どもたちほど目だたないし、程度がいいように思うんだけど、実際に付き合いを始めてみるとはるかに厄介なんです、いろんな点で。

なぜ厄介かってのをひと言でいうと、こうです。

非行だとかこどもの問題行動っていうのをどういうふうにとらえるか—基本的な物の見方があるわけですけども—従来のカウンセリング理論とか従来の心理学っていうのは、何か内心に葛藤があって、心の中にいろいろ悩みがあって、それが問題行動として表現されているんだというとらえ方をしていたんですけども、僕なんかそんなふうにとらえなくて、問題行動もまたコミュニケーションの一種なんだととらえている。

言葉でいうのと同じように殴るという行動があるし、或いは物を盗むという行動があるし、或いは学校へ行かないで親と喧嘩するという行動がある。問題行動＝コミュニケーション行動だと考えなおしてみる。

そうするとですネ、反社会的行動というのは、よくない形でだけども、一応ある種の社会参加はしているわけですね。社会参加は一応プラスだ。まずい形だけどプラス。

非社会的な子っていうのは社会参加がないわけです。学校なら学校、家庭なら家庭という社会に参加しようとしていないというのは、すごく大きな問題点です。

だから、反社会的な子たちは、間違った方向でも社会参加をしているから—だから—方向さえちょっとひねってやれば、まともな形で社会参加できるんだけど、この非社会的な子どもたちについては社会参加をするというところからまず援助しないとだめだ。すなわち、一つ手間が多いわけです。

今日のテーマ

で、なぜ子どもたちが社会参加をしなくなったかというところ、今日お話のテーマにしたいのは。おとなしい子どもたち。ふーっと学校から消えてしまって、家でもただ悩んでいるだけで、そんなに家族をかき回すということをしらないというタイプの子どもたち。

あまり時間がないから、そういう子の話を中心にしたいと思います。なぜその子たちが生れてきて、その子たちに対して我々がどうすればいいのか。その事を中心にお話したいと思います。

社会参加の三つの条件

人間が社会に参加できる。私も…先生方も社会参加をなさっているわけだけでも、どんな場合社会参加しようと意欲がわくか、どんな場合にもうあかんと思うかということですけども—最初から結論的にパカパカッと言ってしまうのですが結局、心理的に三つぐらいの条件が揃っていると社会参加をして楽しい。この条件が一つでも欠けると“俺は生きていてもしょうがない”

それは一つはですネ、《自分のことが好き》。心理学者はこういうのを自己受容などと難しい言葉を使いますが、要するに、ありていに言えば、俺は自分が好きだということです。自分のことを嫌いな人間というのは、大変困るんですね、何をするのも。ほかのことを全然出来なくなってくる。

それからもう一つは、《人は信頼できる》。人というのは親であれ、教師であれ、友達であれ

…。

それから第三番目は、《人に役立つ人間だと思っている》。

ちょっと学者風に言うと、＜自己受容＞と＜基本的信頼感＞と＜貢献感＞とで出来ているんですけども—この三つの条件が揃っていると、人間は社会参加を喜んでできるけれども—どれかが欠けると、あまり楽しくなくなる。幸福でなくなる。

例えば非行少年たちは

で、ちょっと前の非行少年たちの、突っ張ってた非行少年たちのことを考えると、彼らの最大の問題ってのは、むしろこのあたり（「人は信頼できる。」「役に立つ人間だと思っている」）にあります。今日はあまり非行の話はしないつもりですが（少しだけするとすね）、中学生という年頃は発達心理学的にみると、とても特別な時代で—それがだいたい、小学校の5年生ぐらいから中学校の2年生ぐらいにかけてが、ひとつの発達の大きな曲り目なんですけれども—友達関係のあり方が非常にかわる時期。

小学校の4年生ぐらいまでの子ども達っていうのは、大集団で、男女混合で、遊びもその日その日になんとか決まるというような遊びをしていて—わりと開放的なグループね。グループ外の子と内の子とそんなに区別しないし、特に、大人だって内に参加しようと思えば入れてくれるグループを作ります。小学生が野球しているところへおじさんが一発打たしてくれ—という打たしてくる可能性だってあるんです。

ところが、中学生ぐらいになると（中学生になる少し前ぐらいから）—小集団で、だいたい、少なかったら2人、多くて5～6人ぐらいで、同性で—遊びのテーマをはっきり持ったグループを作ります。例えば、勉強する子は勉強する子ばかりで集まるんですね。それからアイドルの話をする子はそんな子ばかり集まるし、万引きする子は万引きする子ばかりで集まるんですね。はっきりテーマを持ったグループを作ります。

それから、閉鎖的なグループで—自分のグループの内側と外側を大変はっきり区別します。特に大人に対して閉鎖的で…まあ、ここの中学生なんかでも、3～4人でごそごそ話している時に、「ちょっと聞かせて。」というものすごくいやがりますね、我々大人を。

そういうグループを作るときに、大人の社会が彼らに対して敵対的であると、つまり迫害をすれば、こいつ（「人は信頼できる」）がまず駄目になりますね。＜大人たちは信用できない。自分らの都合だけで動いて、本当に俺たちのことを思ってくれない。＞と考えるようになりますね。

で、そのへんが非行グループの結束の堅さになっていって＜大人は絶対信用できない。大人だけじゃなくて、自分たちのグループ外側の人間も信用できない。＞というようになります。

信用できないと同時に、自分たちが役立つだ—ということが大変よく知っているわけです。勉強するとか、何かの形で役に立つ—ということはいらないだろう。

ところがすね、自分のことが好きか—というと、全面的に嫌いではないんですね。非行少年たちのいいところは全く自分には0点をつけない—ということ。高い点数もつけてないですけど、0点もつけてないので、まだ救われて、そのために、反社会的けれども、社会参加プラスの形で動いてくれる。

自分が嫌いになる子どもたち

ところがすね、非社会的になっていく子どもたちが最もやられているのがこういうところよりも前に、ここ（「自分が好き」）なんです。

自分のことが嫌いだ—というのが根底にあるので—おおよそ自分のことを嫌いな人間は他人を信頼もできないし、何か人のために動こうとも思わない。（これは一番根本だ—と思いますね。）その—

番根本の、自分自身を受入れることが出来ないというところで、いま問題が非社会化してきている。

人間の価値を図るたった二つの尺度

じゃ、なぜそんなに自分のことが受入れられない人間が出来てきたのか。そこにはですネ、子どもたちの価値観の問題があると思うんです。

私… 23年に生れて、昭和36年に中学を出たんですけども、その時代の中学生というのはですネ、クラスの中で一番の人気者は喧嘩が強いとか、或いはひょうきんだとか、スポーツマンであるとか、そういうのが一番人気があって、勉強が出来るやつってのは、そんなに尊敬されないのね。スポーツもあんまりうまくないし、話もそんなにうまくないし、女の子にももてないから、しょうがネから勉強でもしようかと言って勉強するわけです。ほかに特技がないもんだから…。

ところが、だんだん世の中が変りまして、この頃はそうではなくなって、やはり勉強ができなくて、話にならんことになります。子どもたちは、自分が勉強出来るか出来ないかが大変大事な価値だと思っちゃっています。だから、他人…自分の友達をはかる時にも、あいつは勉強の出来るやつか出来ないやつかってのを真っ先に判断の基準にするわけね。

それを、子どもたちは勉強が出来る子を“かしこい”といい、勉強が出来ない子を“あほ”と言います。わりと露骨な言葉で「あいつあほやねん」。

あほなわけではなくて、ただその学問と相性が悪い、ひょっとしたら学問との相性ではなくて、学校と相性が悪いだけかも知れんだけれども……。

それを、個人の価値だと思っちゃう。そして“かしこ・あほ”だというような言い方をします。

それから、もう一つ彼らが人間の価値を図るのに使うのが、社交性。友達とうまくつき合えるかどうか。友達とうまくつき合える子を“明るい”と言い、うまくつき合えない子を“暗い”と言いますね。

この言葉はいつ頃から出来たんでしょうかね。僕が中学生だとか高校生だった頃に「明るい」「暗い」という言葉づかいはこういうふうに使わなくて、あの子ら「おとなしい」という言い方をしましたね。「あいつおとなしいやつだ」とか、「無口なやつだ」とか、「引っ込み思案だ。」とか、そういう言い方はしましたが、「暗い奴だ」とはいわなかったと思います。で、いつの頃からか子どもたちが非社会的な子どものことを“暗い”というふうになって…。

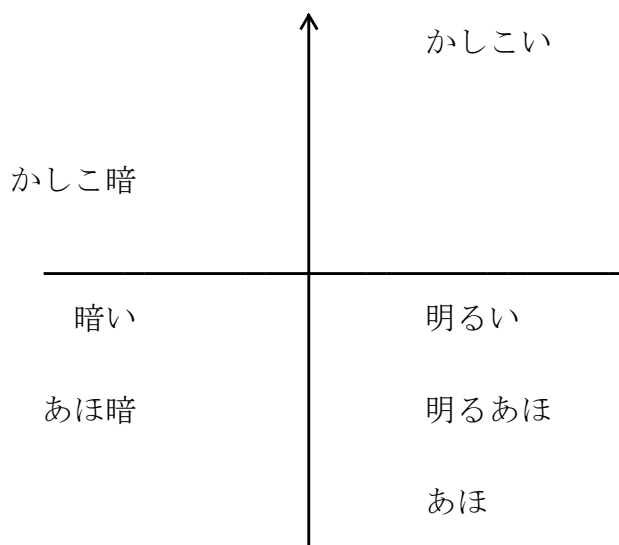


図 1

「暗い」っていうのはネ、あまりよくない言葉使いですね、考えてみると。例えば、結婚式に呼ばれてネ、「花婿はとてもおとなしい方で、あまり社会的には動かせないけれど、芯はしっかりしておられる。」と言いますが、「花婿はとても暗い方で…。」と言うと、後はもう何も言えない。

同じことなんですけれども、言葉使いで持って「暗い」という言葉を使ったのでは、マイナス価値観がそこに大変深くなるわけね。いつからか子どもたちがこういう言葉づかいをするようになりました。

だいたいこれが子ども自身が人間の価値を図るたった二つの尺度のように思うんです、子どもとつき合っていて…

お母さんも同じ土俵の上で

で、お母ちゃんの方に聞きますとネ、お母ちゃんに、「あんたんとこの子ども、どんな子になってほしいねん？」と聞きますとネ、「普通の子でよろしいんです。」と、こう言われる。

たいていのお母ちゃんそう言われます。「普通の子ってどんな子や？」って聞きますと、「まず勉強がそこそこできて……」

「そこそこいうの、どの程度ですか？」

「まあ中学校はやっぱりちゃん行って出てもらわな困る。今の時代やから高校もやっぱりいかんとあかんやろ。」

「高校やったらどんな高校でもいいんか？」と言うと、

「どんな高校とはちょっとよう言わんで、出来たら公立高校の方がええ。それも出来たら古い伝統のあるところ……、」

でー

「高校だけでいいんか？」と言うと

「まあ、そりゃあ大学も行ってくれたほうがよろしい。」と。

「ほんならどこの大学でも何でもいいんか？」と言うと、

「まあ国公立の大学行けたらそれに越したことはないんやけども……。」

「それに越したこたあないけど、どこの国公立でもいいんか？」と言うと、

「いや、もちろん東大に行けりゃ、それほどいいことはありませんけれども…… “ ” というふうに言いはるんです。

けっこう、この“かしこ”というのの要求水準は高いのです、親は。「普通の子」と言っているが、実際には、いい高校へちゃん行ってほしい、それから国公立で、名前言うてもあんまり恥かしゅうない大学に行ってほしいと、だいたい思うてはりますね。そしてー

「それでよろしいか」というと、

「やはり明るい子の方がよろしい。友達おってーそりゃあ、誰でもようけおりますが、しかし、ああいう友達は駄目です。ああいういっしょに万引きしようとかいう友達やのうてー勉強して、なんかひとむかし前の青春映画の中のような、そういう明るい友達がほしい。」

でー

「あとそれだけでよろしいか？」と言うと、

「親の言うことを聞いてほしい。」ともう一本ありますね。もう一本、親の言う子とを聞くと言う尺度がありますが、それはネ、僕は望み薄やと思うんで、最初から断ります。

中学生にもなって、親の言うことやとか先生の言うことをみんな聞いてたら、そりゃあ異常ですわ。精神科にかからんとあかん。所謂、反抗期一本当は反抗期じゃないと思うんですけどー大人たちの言っていることにノウを言う時期ですからーだからーまともに発達しておれば、反抗す

る時代だから反抗しない方がおかしいのね。その時に、イエスといているのは精神発達が遅れているので、精神障害児（発達障害ネ、）つまり、知恵遅れの子は中学生ぐらいになってもそんなに反抗しません。

第三番目の要素（「親の言うことを聞く子」）は僕は引き受けません。第一も、第二もあんまり引き受けませんが実際には。

要するにですネ、親たちがいってるのは、かしこくて明るい子が普通の子だということです。それ以外の子は、だから普通の子じゃない子なんです。

「普通の子」－パーセンテージ

この「普通の子」はどれぐらいのパーセンテージいると思いますか。まあ勉強そこそこ出来て、社交的な子というのは、子供人口の中に何パーセントぐらいいるか。

ものすごい乱暴な数え方をちょっとやってみますがネー知能指数というものがどれだけ当てになるか、大変問題あるんですけどーあれはちょうど 100 を標準にして標準偏差 15 で散らばるように最初からテストがこしらえてあるんですね。だから、だいたい 85 から 115 の間に6割ぐらいの子どもが入っている。

ちょっと、これも乱暴な話ですがーぼくネ、高校生をわりとよく診るんですがー普通のレベルの普通の高校で、あんまり努力せんについて行ける子の知能指数はだいたいどれくらいかというのを考えてみると、普通高校だとやっぱり 110 ほしいんですよ。知能指数ジャスト 100 の子がネ、普通高校の授業に落ちこぼれなしに全科目ついていくのは、ちょっとしんどいんです。だいたいテコ入れしてやらんと。

それは、実は意味があるんです。（ついていける子ってのは、だいたい 110 ぐらいなんです、経験的にも。）110 から上何パーセントの子どもがいるか計算するとネ、だいたい3割ちょっとぐらいなんです。全人口の3割以上は 110 以上あるんですね。

新制高校創立当時の進学率はだいたいあの当方で 36 パーセントぐらいだったと思うんです、新制高校が出来た頃。だから、新制高校のカリキュラム、所謂今の高校のカリキュラムってのは、だいたい上から4割ぐらいの子どもだったら、そうむちゃくちゃな努力せんでもついて行けるようには作ってあると思うんです。

ところがご存じのように、今の高校進学率は九十なんパーセントでしょう。ということは、だ

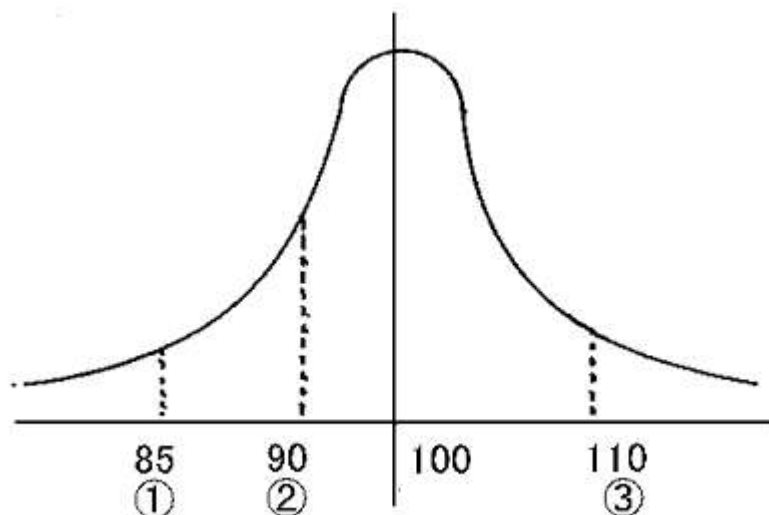


図 2

いたいこれぐらい（図2・(1)の線）のレベルの子まで高校へ入っているということです。で、この部分のやつら（図2・(1)～(3)）はえらい目におうておるわけ。カリキュラムは、新制高校創立当初のまま以上に難しくなっていますわね、前だおしがあって。しかも、高校進学率が増えていますから普通の努力ではついていけないんですよ。

で、今度は中学校なら中学校というところでも、この新制高校への高校進学というものを前提にして授業が進みますから、そうすると、上から3割、4割ぐらいの子ってのはそんなにむちゃをせんでも授業について行けるけれども……。100パーセントではない、決して。どうしても、積み残しが出来る。

こんな計算から考えますとネ、自分は勉強は何とかいけるほうやと思う子ってのは、たぶん6割ぐらいだろうと思うんです。甘く見積って。だから、大変甘く見積ってこの縦線より上にいる、自分はかしこいと思える材料のある子（図2・(2)より右）が60パーセントぐらいで、こっちへあほやと思う子（図2・(2)より左）が40パーセントぐらいね。

それから、「明るい」「暗い」ということに関して（我々の領域で）社交性についてのテストをやりますと、日本人は、比較的対人関係が下手やと思うている人が多いです。内向的な民族ですからね。

これも大変甘く見積って、70パーセントぐらいは<自分は明るい方や><まあ無理いうたら明るい方に入れてもええ>と、そして、30パーセントぐらいは、<私は対人関係が下手や>とされている。そうすると、ロクシチ42パーセントが「普通」になる。つまり、自分が「普通の子」やと思える子は全体の4割ぐらいしかおらん。全体の6割の子は自分は普通の子やないと思っているということね。

これは昔はこうやなかったです。昔は、木のぼりがうまいだとか、走るのが早いとか、喧嘩がうまいとかいうたら、それは、もう普通の条件で立派なもんでしたから、自分を受け入れることが出来るし、友達からも受け入れられるけれども、今は、これしか試験科目がないわけね。この試験科目でやりますと、6割の子は落第するんです。

“かしこ・くら”族の軌跡

落第した子どもたちは結局3群あるわけですが、まず、自分は“あほ”で、しかも“暗い”と思っているやつ。これは古来からおります、ずーと。それは非行やってる子に大変多いんです。非行の子というのは、はじめからあんまり成績のよくないタイプの子がおましてネ、友達も、非行少年仲間の友達しか絶対でけへんという確信があるわけ。いま「つれ」で歩いとるやつ、あいつは友達になってくれるけれども、それ以外のやつは絶対友達になってくれへんと確信しとるわけ。

それから“あかる・あほ”、明るくてあほ。すごい社交的なんだけど成績が悪い子。これは我々の時代にはむしろスーパーノーマルで、一番人気のあったタイプの子なんですけれども、このごろだめなんですよ。この尺度（図1参照）が厳しくなったから。

で、この子たちがどうやってるか観察しますとネ、結局ひょうきんをやるわけ、必要以上に。このあほの劣等感を補うために、明るいという自分の長所をむちゃくちゃ強調して、授業中でもおどけたり、先生をからかったりして……。で、先生が「こら一つ。」と怒ると、喜ぶのね。「うけたー」言うて。で、「廊下へ出えー。」言われて廊下へ出て、廊下へ出てから最初はうれしいんですわ。うけてしまって。しばらくすると興奮がさめてきましてネ、忘れられてしまうんでまた窓から顔を出してなんかやったりして、また怒られるんです。

そうやって絶えず授業を妨害したりして、クラスというものを基本的に成り立たせなくしてい

く働きを大変やっているように思います。で、校内暴力華やかなりし頃の校内暴力児の一群に、こういうのがちょっと一枚かんでいたんですね、いつも。この二つは、今回あまり問題にならない。

問題はここ（図1参照）です。この“かしこくら”なんです。この非社会的な子は一ついてこれる時期に一彼らはどう思うかという、＜俺は勉強がそこそこ出来とる。このままやったら俺は高校行けるし、ひょっとしたら大学にも行けるやろう。＞と思うわけ。だから、＜もう人生は安泰や。あんまり心配せんでもいいねん。＞とあって大きくなっていくわけですね。

で、友達はずっとあんまりおりません。おりませんが、＜友達なんか、あんなんしゃあない。ほんなもんと遊んでる暇あったら勉強した方がいいねん。＞と、こう考えているわけね。或いは、＜勉強したらええねん。＞とまで考えなくても、＜勉強できるから友達なんておらんでもええねん。＞と。

ちょうど小学校の5年生・6年生ぐらいからです。一友達関係のあり方が変わります。その時にクラスの中でバラバラと小さなグループが出来ていくんです。出来て行く時にこの子たちはそれに参加しないことがすごく多いんです。＜あいつらみたいはどこやらのアイドル歌手の話なんかしとってもしゃあないし、バイクにも俺興味ないねん。キャンプするのも興味ない。野球も興味ない。勉強だけしとったらええねん。友達とつき合うの厄介！＞とあって友達を作らないのね。

で、友達を作らないままで中学校へ行きます。いつか成績の下がるときがくるとアウトです。というのは、彼らが「自分を好きである」唯一の根拠は‘かしこい’ということ。で、“かしこ暗”やったら辛抱して生きていけるんですが、“かしこ暗”から“あほ暗”になりますと、もうアカンです。自分が大嫌いになるんです。

抽象能力と現実とのアンバランス

なんでその頃に成績が下がるかというのは一実はちょっと我々の側から意見がありまして一今発達テストをやりますと、ある部分だけ子どもの発達が昔の子どもたちよりすごく遅れているんです。

それは何かというと、抽象的に物を考える能力一例えば数学の数式を考えるだとか、国語の文法を考えるだとか、化学方程式を覚えるだとかいうような能力一は昔は12才だと、正常な子（普通の発達をした子）はほとんどできているという結果なんです。

ところが、この頃は14歳ぐらいなんですわ。ノーマルな普通の発達をしている子に抽象能力ができたあとでテスト上でわかるのが14歳ぐらいなんです。（何でそうなったかわかりません。本を読まなくなってテレビばかり見ているからやろうと思うんですがね。）。具体的なことはよくわかるけれども、ちょっと一歩そこよりも抽象的にものを考えるという習慣をつけてないもんだから、少しそれが遅れるんです。

ところが、中学校のカリキュラムを見ていると、抽象的な科目が一年生の後半ぐらいからすごく増えてくるし、このごろ前だおして小学生でもやっておりますな。小学校でも結構エクス出でたりして、一次方程式を解いております。

あれは、不可能なんです、精神発達の…抽象思考能力ができるまでの子に「解け」ということが基本的に不可能なので、いくら努力しても解けなくて、そこまで発達したとたん、たいして努力しなくても理解できるのね。それは脳の発達そのものだから…。だから、訓練で早くならないんです。

それは、ちょうどまだ足が十分に強くなってない時期の赤ん坊、8カ月とか7カ月の赤ん坊に歩く訓練をするのと一緒で、いくらやってもあかんのですわ。ところが足がしっかりするところ

まで体が発達すれば、なんも訓練せんでもすぐ歩くんですね。

と同じように、数学の能力なら数学の能力というものが発達する以前にいくら訓練しても、それは暗記として出来るだけで、本質的な理解はできない。

だから、いま遅れがきているのにですネ、カリキュラムは、昔と同じように12才ぐらいで抽象能力はできるもんだと思って作ってありますから、そうすると絶対に落ちこぼれるわけです。そこで、極くそういうのが早く進んでいる例外的な子以外は落ちこぼれていくのが普通一。

そうしますと、その“かしこ族”所謂“かしこ暗族”はかわいそうに‘あほ暗’になるわけです。

その時に「自分のことOKや」「自分のことが好きだ」と言えなくなって、前途に全部絶望してしまって何もかもペアになってしまう。それまでの人生経験が全部ご破算になるんですね。全部ご破算になった時に彼らは何もしくなくなるんです。いっさい何もしくなくなります。

「自分を好きになる」

ですから一ぼくがそういう子どもたちと会って最初にしてやることは一いかに彼らが自分を好きになれるか、それを手伝ってやることから、始めないとしょうがないとおもうのね。つまり、その子たちが出来ていないこととか、足りないこととか、欠点とかをディスカッションすればするほど、彼らは自分のことが嫌いになるから一すでに達成できていることとか、できていること、長所、そんなところをディスカッションしていった方がずっと建設的だと思うんです。

普通、親とか教師とかいうのはですネ、そういうやりかたをあまりしないようなんです。だいたい、親・教師のやり方を見て思うのは一いつも頭の中に理想の子どもをなんかおいといて、そこから現実の子どもというのを見まして、減点法で採点しますから、どんなことをしても採点は絶対マイナスで、<おまえここたらん>ということになります。

<これもあかんし、あれもいかん>と、こういうやり方をついやっているように思います。これはやらんところとおもいます。絶対にこれはせんところと思います、最初。つきあいの初期に。

ゼロ式採点法(1)「プラス発見」

私がやることはそうではなくて、最悪の子どもというのをなんとなく知っているわけで(こういう商売をしていますからしょっちゅう最悪の子どもを知っているわけです)、最悪の子どもから見ますとネ、絶対プラスなんです。だから、プラスの話から始めるんです。

例えばある中学生がおりまして、彼の課題は勉強ができないということ。「おれ、もう勉強できへんし、絶対今後成績あがる心配はないからもう学校行かへん。」「あんたの欠点は何や」といいますと、誰に言われたのかうまいこといいよります。「集中力にけること。忍耐力がないこと。」(多分学校で言われたんでしょうね)

集中力がないとは何かというたら、散漫力があるということです。忍耐力がないとは何かといえますと断念力があるということ一。「この散漫力と断念力というのは、ごつつう大事やで。」と僕言うのね。

そう思いませんか。あのネ、あることをする時一例えば、僕が本を書いたり論文書いたり、今日もこうしてお話しているわけですが一いち番苦勞するのは何をしゃべるとか、何を書くかではなく一何を書かないかです。一定の時間の中で、どのことは言わんところと言うのは、ものすごく勇気がいるわけね。断念力です。あれも言いたい、これも言いたい、これもしゃべりたい、これも知ってもらいたい一が、それは言わんとこ、と。断念力は絶対大事です。

散漫力つまり雑学力です。雑学力というのは絶対生きていくうえに大事です。「集中してもうて忍耐があつたら、人間の幅がどんどん狭くなるだけで、いっこともちゃんと大人になれへん。散

漫力と断念力さえあればこの世でちゃんと生きていける。」とこういいます。

「俺暗いねん。」といます。「暗いというのは何か。暗いいうのはつまり、あなたは人の気持をいつも考えているということです。人の気持を考えているし、感受性が豊かやし、人を傷つけないで暮しているし、優しい。」と、こういいます。

そうすると子どもはそうかと思うわけ。＜暗いイコールマイナスやとっていたけど、それは違うのだ。明るいけれども人の気持をあまり考えず、自分のしたいことばかりパーッとしとるとか、あるいは優しさが足りないとかにくらべたら、自分はよぼっどましや。＞というふうに再評価できるわけね。

私のやっていることは、その子どもそのものを変えようとしているのではなくって、同じ現実があってそれに違う方向からスポットライトをあてたい、まず、最初に。

ゼロ式採点法(2)「たんぼぼの心」

最初から子どもを変えよう変えようとしたら絶対いやがりますわ。だいいち子どもを変えられへんと思うんですわ。精神科の医者が言うのも変ですけれども、人間の性格ってのは、そう簡単に変えられるもんやないと思います。

《たんぼぼに生まれたやつは、一生たんぼぼ。たんぼぼが菊の花になって展覧会に出ようって、それは無理や。たんぼぼに生まれたんやったら、一生たんぼぼで暮らす覚悟をしたらええ。たんぼぼにはたんぼぼのいいところがあるやないか》と思うんですね。それを言いたいわけです。

《菊の花に比べて自分はたんぼぼや、しゃあないな、と思うな。たんぼぼはたんぼぼのままで一生ちゃんと大きなたんぼぼのままで暮らせ。》だから、暗い子どもを明るくしようとか、勉強できない子どもを勉強できるようにしようとかいう働きかけは当面やらない。最初それをやりますと、きつと挫折する。なんでかというたら、子どもと同じ土俵の上で話をしてるから。さっき、そこに書きました十字のあの価値観の上(図1参照)でだけ話してるでしょ。それではあかん。明るくなる訓練なんかやったって、「明るい」「暗い」でものを分けている限りはあかん。

勉強がよくなるということが、ものすごく大事な価値というふうにしてやっていくんやったら、そこには恐れがある。もしも、また成績が落ちたらどないしようという恐怖心があるから、おおよそ、その恐怖心が動機で勉強している限り、いつかあかんようになりますわ。だから、勉強も見てやりませんし、明るくなる訓練もしませんし、ただ、今現状のままでええということをいっぱい言います。

ゼロ式採点法(3)「自分をベストに使う」

自分という道具一心とか体というのは、これは道具だと思えます。自分の人生というゲームをじょうずにするための道具でー問題はですネ、この道具、取り替えられないんですよ。例えばゴルフだとかテニスだとかやっているでしょ、下手な奴ほど自分の道具に文句いうのね。＜パット入らへんから、これはパター悪いから買い換えよう＞と思うわけ。(スポーツ用品屋さん、それで儲ってるんですから別に文句いう筋合はないんですけれども……。)

ゴルフのクラブだとか、テニスのラケットは買い換えられますが、人間の体と人間の心という、この道具は買い換えられないんで、どこにも売ってないんで、今もっているこの癖のある道具をどうやって使いこなすか、というのが基本的な課題なんですよ。で、だから、そのじぶんを改善しようと思っていると、必ず失敗すると思う。

そうではなくて、今の現状のままの自分をベストに使いこなすにはどうすればよいか、というのが我々がしなきゃならんことだ。そしてそれを子供にも教えなきゃいけないんで、そのためにはまず一番最初に自分の持っている道具を好きにならんと、この道具嫌いやねんと言うとったら、

使いこなせる気にならんだろう。

だから、<これはたいへん思いやりの強い、優しい、いつも感受性豊かな道具で暗いことあれへん。ある人は暗いいうかもしらんが、それは見方が間違るとる。勉強できなくてあほやというのと違う。学校の先生方が怠慢で自分に合うた勉強の仕方をまだ見つけてくれへんのか。そやから、あんまり先生は頼りにでけへんから、しゃないから、自分で自分に合うた勉強の仕方を見つけるしかないやないか。>と、こう思うてほしいわけ、子どもたちに。

あるいは、子どもたちに、<先生そういう教え方わからへんよってからに、もうちょっと違う言い方してみてください。>と言えりこどもになってほしいわけです。もっと積極的にはね。

そういうふうと思うので、最初から改造しない。まず、いつもこれやられているから、こっちから見るというのが一番最初にせないかんことだとおもいます。

ゼロ式採点法(4)「頭の中の理想を殺せ」

子どもとコンタクトができれば、これはできるわけです。子どもと先生方がコンタクトできればできるんですが、多くの場合、コンタクトできなくなりますね。

コンタクト出来るのは誰かという親ですね。最初ネ、やはり親にこれをしてほしい。親にこれを教えてあげてほしい。だって、親は、来て「うちの子ほんまに暗いですし、勉強もできませんし、悩みますわ。」というて親が悩んでる。

それは親の頭の中に理想があるからです、子どもに対する。この理想の子どもってのを早う家から追い出してほしいのです。こいつを殺してしまうと、話が非常に簡単なんです。

で、もっともですネ、ここの学校はどうか知りませんが、多くの学校の先生方は理想の親像というのを頭の中に持ってまして、学校に来よった親を、そこから引き算する癖がある。「あの親しゃあないねん。いっこもわかっとらへん。」とこう言います。そういわんといてほしいんです。親もやっぱりいっしょで、最悪の親から比べたら、<あの親こんなええとこあって学校へ来よるやない。とにかく偉いもんや。>そう思うてほしいんです。

およそこの仕事っていうのはですネ、僕の立場からいえば、親と学校の先生とを敵にまわしたら、絶対に成り立たんと思ひますね。学校の先生方からいえば、親を敵にまわしたら、子どもを扱う仕事って絶対成り立たへんと思ひますね。親の足らん点、親の問題点を親に対して指摘してやると、親を敵に回しますから、親自身が自分を好きになれなくなりますから、私は駄目な親だと思ひてしまいますから、そうなる仕事できないんじゃないかと思ひます。

だから、まずいちばん最初親とコンタクトできて、その親とやっぱり同じ事をしてあげてほしいと思ひます。<あなた、お母さん、一生懸命やってはる>と大変感謝していることからはじめんたら話にならへんやろうと思ひます。

一緒に作戦を立てて、子供を援助していく。<子供を一とにかくこども自身は自己嫌悪に陥るとんのかから一攻めたんとしてやってくれ>というところから始めんとあかんやろうと思ひます。今の非社会的な子供たちってのは、耳の中に入った虫みたいなもんでつづけば絶対もっと奥にいくから「とにかくつつかんとちょっと待とこう」と。

対応のハウ・ツウ(1)「逆立ちしてみる」

僕自身が子供とコンタクト出来た時にはネー子供が来てくれた時には、最初にこう言ひますわ。「君、ところで、いつごろから学校に行くん？」と。子供はびっくりしよります(そんな言われると思ひてへんからね)。

嫌な顔をしますから、「明日から行けへんやろ。来週も行かんやろ。そんなら、いったいいつから行くねん。ひと月後か？」というたら、「まあ、ひと月もしたら行きます。」。今頃の季節や

ったらですネ……今ぐらいになると、多くの子供は3学期から行くと言いますな。

「三学期になったら行く」。僕は「そんなあほなこと言うな。」と言います。三学期になったら行くというのは最悪のやり方で、そんなことしたら、三学期一学期全部行かんならんでしょ。だいたい最初行っという途中で息切れ、きつとしますからね。だから、その息切れすることを計算に入れておいてやらんといかん。だから、今やったらネ、僕はネ、「12月の期末試験が終わってから行けへんか？」と言います。期末試験が終わってから終業式まで2・3日いこうや。ほんな正月大きい顔して過ごせるやろ“俺言ったで一”と言うて。そこ行けへんかったら、正月もやっぱり、“俺登校拒否じゃ”言うて過ごさなあかん。だから最後だけいこう。」という。

或いはですネ、「来週の月曜から行く。」という「そんなあほなこと言うな。来週の月曜からやったら、一週間行かんなん。だから土曜日から行こ。土曜日やったら、半日だけ行ったら後はしんどかったと言うて日曜日は休める。」月火水木ぐらいまで休ませたら、次の週は「金曜から行こ。」と、こう言うんです。だんだん日曜から逆に前にのびします。

まあ、そんな作戦を立てるけれども、ともあれ、一番最初にいつから行くか言うて、いつ行くかを決めます。「3学期のはじめはあかん、二学期の最後の日、数日か、それがあかんかったら、もう三学期の最後や。三学期の最後に行くことにしようや。」と。

対応のハウ・ツウ(2)「悩まない登校拒否をしよう」

そして決まったらですネ「それまでは学校行かへんのやな。学校行かへんことにしよう。とにかく、そこまではもう行かへんねんから、行こか行くまいか悩むのは止めよう。」

学校へ登校しないことと、学校へ登校してないことを悩むこととは違うと思います。登校しなくても、悩んでも別にいいわけです。

悩まんと登校拒否していますと、《登校拒否》と言うてもらえんで《怠学》と名前がつくんですね。つまり、さぼりといわれます。悩んで登校拒否すると怠学やと言われるんですむので親や先生の風当たりがぐっと緩いんです。

本当の《怠学》というのはです。一うちに閉じ込もって寝とったらそれは怠学とはいわないので（口で何と言うとろうが）、やっぱり登校拒否やろうー《怠学》というのは楽しいことをしててなんか非行でもやっとして学校へ行かん、いうのが怠学やろうと思うんです、定義上。

だから、うちで閉じ込もつとるぶんには、それは何をしようがー悩んでいようが悩んでなかろうがーそりゃあ、《登校拒否》だろうと私は思うんで、悩まない登校拒否をする相談をする。

悩んでいると人間は大きくならないのね。みんな悩んで大きくなったといいますが（まあ確かにその通りですが）、悩んだから大きくなったんじゃなくて、悩んだけれども大きくなったんで、悩まない方がすくすく伸びますわね。僕みたいに背が高いと、あいつなんの悩みもなかったんやろなとみんなにいわれます。

悩みなしに登校拒否をやってほしい。なんで悩みなしにやってほしいかという、悩むと言うのは、すなわち自分が嫌いということでしょう。「あんたちよつともつと悩んだらどうやねん。」というの、つまりあんたもつと自分を嫌いになりなさいということやから、それは大変よくないやろう。自分を好きになってもらおうとしているんやから、悩んでてもろうては困るわけです。基本的には。

まず、悩むな。脳をゆっくり休めよ。そしていついつまでは学校へ行かへんと決めたんやから、そのあいだ、学校へ行く・行かへんなんてことを考えることはやめとこ。学校へ行ったときの用意もせんとこ。家で勉強しようなんてこともやめとこ。家で勉強したらきつと自己嫌悪に陥りますから、やめとこ。で、1日の時間をどうやって過すか考えよう。建設的なことはやめとこ。

対応のハウ・ツウ(3)「できること・すべきこと」

で、この時に子どもたちにですネ、すべきことと、できることをよく分けさせます。今の子ども、これ全然分離できないです。勉強すべきだ。高校へ行くべきだ。友達とつきあうべきだ。先生のいうことを聞くべきだ。けど、できるこというたら、そんなによくないんですわ。勉強できないですわ。友達と遊べ、言うても遊べないですわ。学校へ行け、言うてもいけないです。

で、できること何かあるか言うたら、例えばうちの中で、朝起きるとか、飯食うとか、テレビ見るとか、そんなんはできます。で、「もうちょっと何かでけへんか？」と言うたら、まあ、家の手伝いしようという子もあります。

男の子の登校拒否児にはけっこう家事好きな子がおります。で、その家事ものすごく好きなんですけれども、やらせてもらえないんですね。「そんなもんせんと勉強しい。学校もいかんとうちで炊事しとってどないなるんや。」とお母ちゃんいいます。できることあるのに、禁止されている子おるんです。

<できることがあったら、それはせえ。何でもええから楽しいことはせえ。すべきことはいっぺん忘れてしまいな、しばらくの間。ちょっと執行猶予あげるからそのあいだ忘れとき。すべきことからだんだんできることへ変わってきてほしいんだけど、急に変われへんやろ。だから、できることだけ確保しよう>というアプローチをまずやります。

だいたいめどはですネ、中学生だと3カ月くらいです。小学生だとうまくいけば一小学校の低学年・中学生だと一3週間くらいです。三週間もバチッと休ませてやれば、子供は退屈して学校へ行きます。

で、まあ三月ぐらいみて、その間「とにかく、このことを考えるな、ちょっとでも考えたら先生怒るで！」と言います。「先生、学校の話が……」「いやそれ言うな。」「そんなこと今言うたかて、それはすべきことであってできることとちゃう。出来るようになるまで考えてもしゃあない。」

もちろん、これネ、親教育がかなりいるんです、親もこれできてないですから。今、その子供ができることと、その子どもがすべきことと完全に混同しているから、現にできることをちゃんと確保していくというのが基本的な働きかけなんですネ。

だから、最初とにかく、《子供とプラスの部分でつきあい出そう。子供のマイナス要素とつき合わないで子どもの一番ええとことつき合おう。もしええとこがなかったら、マイナスの部分はどう使うたらええとこになるか考えよう。暗いとか、勉強できへんとかそういうことをいったいどう扱ったらプラスになるか、考えよう。》

第2段階として、《子供に休みをとらせよう。》

第3段階として、《子供にできることをやらせよう。出来ないことをやらせないでおこう。》

親と子どもと教師の三角関係

これぐらいの基礎工事をして、かつですネ、このあいだに私は、親と大変精力的に会います。それは親教育絶対必要だと思うから。親教育ってのはなにかというと、今言うたようなことです。要するに、《子供の欠点とつきあうな。子供ををせつつくな。子どもを追いつめるな。》

そやなくて、《子どもといっしょに遊んで暮らせ、しばらくの間。子どもと友達になれ。》

とくにこの頃の親は特にひどいんですが（むかしの親もひどかったんだろうけども）、昔の親は忙しかったものですから、子供をかまうている暇そんなになかったんで、子どもも息を抜けたんですが、最近の親は暇ですからね。

「崖の底でのわたりあい」

子どもおるでしょ。で、親がこの子どものどこにおるかという、だいたいこの辺（図3参照）

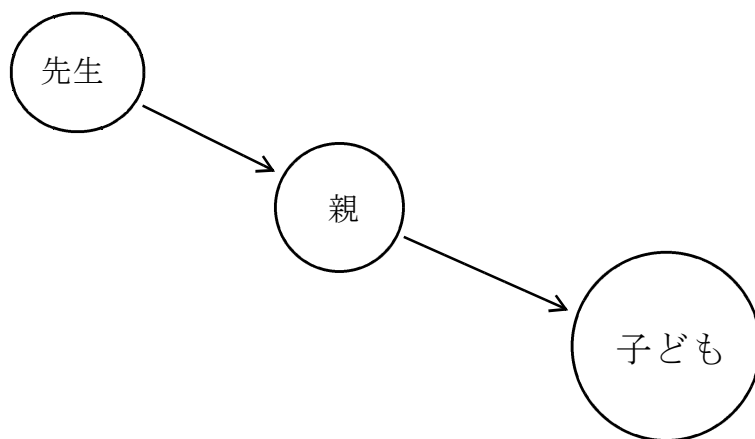


図 3

におるんです。上から命令をしている親がおりますですね。で、今度は登校拒否をしたり、暴力をふるったりすると、「おねがだからそんなことやめて！」と言うて、特に、家庭内暴力児の親というのは子供の奴隷になります。

これ、どっちやっててもしゃあないよ。子どもとの関係がこうやって縦関係やったら挫折してしまった子どもを助けられないと思うのね。

挫折してしまった子どもというのは、崖から落ちて下でうごめいている人みたいなもので、上から「上がってこい、上がってこい。」と言うてもあかんし、崖のいちばん底から「おまえあがらんか。」言うてもあかんし、どっちもあかんのやと思います。同じところまで下りていって、友達関係になってやらんとしゃあないやないか。で、崖のところまでとにかく下りていって、「いっしょに考えよか。どないしたらいいやろね。」と、答えを持ってない人にならんとあかんやないと思います。

親とか教師が、答えを知って子供に教えてやるという関係は、まずいんじゃないか、この時は。

子供はひとりひとり、それぞれにその問題がちがうとおもいますから一だから、今日言うてるような抽象的な知識ではなくって、その子供とわたり合っていく中でしか本当の答えはわからへんと思いますね。

わたり合っていくためには、今日いうたような基礎ができていて、子どもと完全に友だちやでという関係になってから、はじめて相談できるわけなんです。「先生どないしょう。」と、子どもが言うてきてくれるようになったら、もうほとんど仕事が終わったも同じなんやね。「こなあせい、いうてんのや。」とこっちは言うて、子どもが「ふーん」と言うて聞いている間はあかんのやね。子供のほうから、問題・質問持ってきてくれるようにならへんかったら、問題児の現状というのは、基本的には成功しない。

そういうその友だち関係になったらですネ、そうしたら、昔の登校拒否とあんまりかわらんアプローチが出来ます。つまりそれは、学校に対する恐怖心をちょっとづつ抜くということね。学校の中にネ、先生方の中でたった一人でもその子と完全に友だち関係で横に並んでやれる人がおったら、学校へ来れるんですよね。

学校に来たら先生みんな上からもものいいよという状態やったら来られへん。その子らの一番かなわんのは、自分が嫌いでしょ。嫌いな自分をおまえあかんやつやと強調してくれる人が一番嫌いですから一だから、そういう人がおるところには、なるべく来えへん。

そうやなくて「おまえステキやなあ。」というってくれる人がおったら来よります。

「味方の味方は味方」－家庭訪問の論理

最初は訪宅してやらんといかんかもしれません。訪宅するかどうかということについてはです、僕はいつも子どもに聞いてというんです。全部子どもに聞こ。学校の先生方も親もネ、僕んところに聞きに来るんですわ。僕に聞いたってわかりません。「先生家にいってもいいか、言うて子どもに聞いてみい。」というんです。子どもがいいといたらいいし、子どもが「いやや！」いうたらそりゃああかん。

「いやと言われたら困ります。」言うて、先生とか親とか言うんです。「困っても、それはすべきことであっても、出来る事ではないから今はしゃあないやないか。学校の先生がたが、来てもらえるようなところまでやっぱり関係改善をまずしていかんとなしゃあないやないか。」と私は言います。

で、学校の先生方が訪宅をするのを大変子どもがいやがるのはネ、どんな時かといいますとひじょうにはっきりしています。親が敵の時。自分の上に親がおってですネ、この親が学校の先生と完全にツーカーでつるんでおりましてな。もっと悪いのは、上に先生がおりまして、命令をしております。こう、遠隔操縦をしております。こういうふうになってますとですネ、この子どもは絶対に先生に合いませんわ。

敵の敵は敵、敵の味方は敵やもの。敵の親分はもっと敵やから、そんなもと合うわけはないのです。(こんなんになってしもうてからこの先生自身が動くというのも変なはなしですが……。こうならんようにしてもらわんとほんとは困るんです。)

最初、この親にですネ、友達のところへ下りてきてもらわなあかんのです。親が子どもの味方という、こういう図式をいっぺん作ってもらわんとあかんのですね。

で、私は学校の外におりますので、この時には先生を敵に回せ、とにかく先生を敵に回してもうたらええと言うんです。そんなら親と子どもが味方になれるから。いっぺんその学校の言うのはおかしいと言うたりなさい。子どもと一緒に、学校の悪口を言うとならよろしい……。一時期ね。

そしたら、ほんならはっきり子どもがネ、<この親は私の味方だな>と思ったときを見計らってですネ、ちょっと作戦を変えます。「お母ちゃんな、学校に行つて先生と話をしてくる。先生のやり方おかしいから、こないしてくださいって頼んでくる。」

で、この辺でせんせいとこうちゃんと連絡がありましてな、事前に。今度は親の友達として先生が現れてくれると、この時には子どもの友達は親ですから、そのまた友達が先生で、で、子どもも「先生来てもらうていい。」ということになる。「先生えらい意見変りはったで。なんや前はけったいなオールドミスのかそばあで、しゃあない人やと思うとったけど、よう話してみると、先生もよう話わかってくれはるんや。」とこう言えばいいのです。

その時に親に信用があれば、それは子どもは信用してくれますね。だから、そういうふうな指導を私はします。

学校の現場でそれをどうやってやるかというのは、先生がたの方に工夫していただかんと、わたしは学校に勤めたことはないのだからわからないのだけれども……。

まず、ほんとは基本的に最初からこういう関係になつてんとあかんので、親も教師も子どもも全員が、こう三角に横に並んでんとあかんので……。先生が一番上におつて、次に親がおつて、次に子どもがおつてという構造はものすごく悪い。いったん問題が起こったときに、にっちもさっちもいかんようになるんじゃないかと思えますね。

で、まあ非常に基本的なあらすじのスケッチでした。

最後に

問題が起こってからではほんとに遅いですので…ほんとは…毎日のその教育活動の実践の中で、子ども達にいかにかその自分を好きでおらせ続けるか。自分の中にあるプラスの要素をいかにか発見させるか。欠点ばかり見るんでなくて自分の長所をどうのばすかを援助するか。

それから、勉強とか対人関係とかいうようなごく狭い価値でなくて、様々な広い価値観で子どもを見てやれるか。そのあたりが基本的なポイントやおもいます。

私は原因論、全くやる気ないんですね。なぜ登校拒否が近年増えてきたか、型が変わってきたか、という原因論する気全然ないんですけども、まあ、敢えて何でか言うたら、それは学校なかったら登校拒否もないわけでー学校の中での子どもの住心地が悪くなっていて、それがつまり子どもが自分のことを嫌いになるような形での働きかけがやっぱりふえちゃったのだろうしーそれから、子どもが先生を（本当の意味でまかせきれない。先生ってのはいつ裏切るかわからん。）というような、そんな感じを持つような状況がふえちゃったんだろうしーあるいは、その子どもが本当に学校という社会、家庭という社会、あるいは、この日本国という社会に対して＜自分は役立たずのごくつぶしではないんや。自分が自分の生き方をすることできっとみんなの役に立てるし、そのことでみんなが受け入れてくれるんだ。＞という実感を与えられないような形にだんだん変わってきてるんだろうなとー外からは思うんです。

そのあたりをちょっとこううまくしていただくと私の仕事が減ってくる。あまり減っては困るんですが、まあ、減ることを願っています。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載